

準備号を読んで

特集「査読の研究」にすこしだけよせながら

富山 一郎

I 彩 (いろどり)

文(ぶん)の彩(いろどり)。2021年3月23日おこなわれた『MFE 多焦点拡張 다초점확장』創刊準備号の合評会で話そうと思ったのは、この彩ということだった。一つひとつの文章内容への批評というより、この準備号に集まった文章たちが織りなした言葉の姿の輪郭を、まずはつかみ取ったのだ。それは今号の「査読」というテーマとかかわらせていえば、内容を批評したり審査したりするのではなく、文章に込められた思いや感情、決意や怒り、あるいはそこに流れる時間やリズム、さらには浮き上がる風景や抱え込まれた出来事を、味わうということかもしれない。編集委員である鄭柚鎮さんが、しばしば、文章に味があるとか、逆に味がしないといっていたのを思い出しながら、私も準備号の文章を味わっていきこうとしたとき、この彩という言葉が浮かんだのである。

冒頭にある川村邦光さんの文章に、「DJ 風に」とある。もちろんこのDJはお皿を回すDJではなく、深夜ラジオのそれだが、な、なんじゃこりゃ、と思いながらおもわずユーチューブでジャニス・ジヨプリンを流してしまった。そんなことをしてしまっ

たおかげで、後の文章にも音や声が隠れているような気がして、耳をそばだててしまった。川村さんの書いているように、ジャニスはすでに亡くなっている。だが歌声は死ぬことはない。逆に言葉が声と共に受け取られるとき、死者がよみがえるような感覚に襲われる。たしかにそれは川村さんがいうように、「奇蹟」(16頁)なのかもしれない。またいつものライブとコロナ渦での自宅での配信ライブをくらべ、自ら音の、「出てくる音がまったく異なっている」という日高さんの言葉の背後には(「自分の居場所を探すということ～6月13日の集会によせて」)、日々の状況の中でいつも音を出すべく身構えている日高さんがいる。書かれた言葉は、そこでもやはり声の近傍にあるようだ。

そんなことを思いながら読んでみると不思議なことに、文章が頭のなかだけで解読されるのではなく、体感としてつたわってきたのである。味がするのである。それは味覚ということではない。何を言っているのかうまく聞き取れないジャニス・ジヨプリンの、脈があり伸びのある声に味があるように、あるいは言葉が帯びる色に味があるように、味があるのだ。今、ここで味わっているのだ。読むということは、こうした

今生じている体感なのだ。

それは、それぞれの文章に文字通り文体の体ともいうべき存在があることに気が付くことでもある。一文がとても硬質で、一文だけで、いやその中の一つの単語だけで、長い文章を読んだような気持ちになる文体。ゆるゆると言葉が連なりながら、全体を構成していく文体。まるで横に坐って話を聞いているようだ。全身で身構えて受け止めなければならない直球勝負の文体も、素敵だ。段落がすすむたびに、その思考の内部に深く引きずり込まれていく文体。思考という営みがきわだつ。先ほどの日高さんの文章は、日常という状況をチューニングしながら、いつでも歌えるようにスタンバイしている文体なのだろう。文章が今にも歌いだしそうだ。感情と思考が丁寧に織りなされながら、そのどちらでもない場所に導いていく文体。その感情が痛みや悲しみにかかわるものであるとき、読みながらしばしば立ち止まり、かみしめ、うつむき加減に頭を傾けたくなる。どれもこれも味がある。

こうした味は、まずもって、雑誌におけるジャンル分けをどうするのかということでもある。よくあるような論考やエッセイといった分け方以外に、雑誌の味わいを少しでもきわだたせるようなやり方はないだろうか考えたのだ。また「論文」を軸とした、「研究ノート」、「書評」、「研究報告」といった文章分類が、内容以前に文体の規律を担っているのは明らかであり、それはまた査読ということと深く関係しているだろう。査読とはまずもって文章の分類、

ジャンル分けなのであり、それは多くの場合、格付けにもつながっている。またこうした規律を問題として論じることと、彩は同じではない。規律をテーマとして論じること自体が規律の中でしかなされないとしたら、そこではやはり味は失われ、彩は消えることになる。

まず思うことは、準備号がみせる彩を、このような規律に従わせたくないということだ。そして彩をどう確保するのかということは、査読を成り立たせている規律に問いを立てることを、雑誌自体において遂行することでもある。ではどうするか。そうした分類枠組みを取っ払うというのも一つの考え方だが、たどえそういうことになったとしても、まずはこの雑誌がどんな彩をもち、文の味をきわだたせるにはどうしたらいいのかということは、やはり考えるべき事なのだろう。

ところで雑誌が言葉を介した人と人のつながりだとしたら、その集まりはどのようなものなのか。いや正確に言えば、その集まりをどのように輪郭づければいいのか。思想の科学研究会が、様々なサークルについて『共同研究 集団』（平凡社 1976年）という本を出した時、その序論として鶴見俊輔が、ある集団について考えることを、「煙の道をなぞる」、あるいは「煙そのものの内部の感覚」（7頁）と記している。サークルという集団を考える作業において多くの場合、そのサークルが作り上げた雑誌という存在が一つの焦点になることはいうまでもない。しかしサークル誌の内容や傾向を要約したり、そこにある共通の主張や学

術的な意義を確定したりすることは、はたしてサークルという集まりをとらえたことになるのだろうか。鶴見が、「煙そのものの内部の感覚」という文字通り煙にまいたようないい方で示そうとしているのは、テーマや分野やあるいは方針といった言葉においてはつかまえることのできない集団性や方向性が、想定されているのではないだろうか。

言葉と集団の関連は、その言語的な意味内容にとどまるものではない。サークル誌が趣味の雑誌であったとしても、それが作り上げるつながりが、趣味という領域にとどまるものだとは限らないのである。鶴見たちが注目したのもこの点であった。私も、この煙そのものの内部の感覚ということを楽しむながら、いまからこの『MFE』がどのような道を動き始めるのか、もし雑誌が媒介する集団性という言葉つかうなら、その集まりが一体どのようなものなのか、すこしでもその動きと形の輪郭をつかんでみたいと思う。

それは、逆にいえば、わかりやすい話になることへのけん制でもある。査読的な規定の手前を、彩という言葉で考えてみたいのだ。内容やテーマの手前に彩があるということを考えてみたいのだ。それはとりもなおさず、雑誌『MFE』における「私たち」の問題だ。

そしてこの「私たち」には、当たり前のことなのかもしれないが、まずもって書く、そして読むという言葉にかかわる営みが深くかかわっている。この行為のつらなりを見据えることが、大切だと思う。そして

し一人ひとりのこうした行為の前に、それぞれの属性が優先されるならば、「私たち」は属性の足し算や最大公約数的属性となるだろう。学会があるから学会誌がある、あるいは同人がいて同人誌がある、ということだけになってしまう。しかし雑誌がいかなる会や同人を生み出すのか。問われるのはこの方向性であり、その時雑誌は、属性を前提にするのではなく、書く／読むという行為の中にある。

書いたものが読まれ、読むことがまた書くことにつながる。こうした行為の連鎖は、私にとっては、出来事と感情と思考が織りなされながら書き進められる沈正明さんの『『始まりの知』 記者あとがき』にかかわることだ。すなわち私の『始まりの知』が読まれ、そして書かれたのを、また私が読んだのである。正明さんは、東日本大震災、そして毎日死者が数え上げられていく現在の中で、身近な死と世界に広がる多くの死と悲しみの中で、『始まりの知』を読み、そして書いた。それをまた私が読んだのである。それは言葉というものが、読むということにおいて新たな生を獲得するような展開だ。また、自分の文章が密かに抱え込んでいた感情が、読まれることにより引き出され、それが再び自分を覆うように感じてしまった。

書いたものが、読まれるという経験。準備号のいくつかの文章に登場する藤田省三が、読むことを「経験の再組織化」とよび、この再組織化により「現在」を「再編成」していくことが読むことだと述べたことがあったが（竹内光浩・本堂明・武藤武美編

『語る藤田省三』岩波書店、2017年、10頁）、そこには経験が「利用の素材」になることへの根底的な抗いがある。鄭柚鎮さんが準備号で、「慰安婦」問題とされてきた議論空間を、どの陣営が正しいかではなく、一人ひとりの生きてきた痕跡が「正しさを判定するためのモノ」になる事態としてとらえ、「ここは証明できるのか」と問うのも、かかる「利用の素材」の問題だ。藤田は端的にそれを「物化」とよぶ（藤田省三「戦後議論の前提——経験について」1981年『著作集5 精神史的考察』所収）。

書く／読む行為の連なりは、まずもって「物化」とは異なる経験のありかたを探ることなのかもしれない。それは書く者と読む者のそれぞれの場や時間において抱え込んできた経験が連結し、新たな場へと変わっていくことなのかもしれない。こうした書く／読むという行為の連鎖の中に、『MFE』を考えてみたいのだ。

II 書く／読む／書く／読む…

『MFE』に向かう私自身の道程については、準備号で書いたとおりである。また雑誌ということを具体的に考えた起点には、中井正一たちが1936年に刊行したタブロイド判の『土曜日』がある。ところで、中井にそくしていえば、この『土曜日』以外にも、『美・批評』、『世界文化』という雑誌が同時代に存在した。『土曜日』も含めこうした雑誌は、戦時下の抵抗を担う文化運動として言及されることが多いが、『土曜日』とそれ以外とでは大きな違いがある。

『世界文化』などが、いわゆる大学で哲

学や思想を専攻する者たちによる論文を軸とした学術雑誌の体裁をとるのに対して、『土曜日』はタブロイド判の紙面に文字通り雑多な文章が並ぶ。『MFE』の準議号の彩をどのようにきわだたせるかということ考えた時、『土曜日』が視覚的にうったえるタブロイド判の新聞形式であるということが、あらためて了解できた。なるほど、彩はまずは分類枠組みを決めるのではなく、視覚的に並べることにより浮き上がるのだ。彩を考えながらそのことに気がつくと同時に、いまウェブ雑誌としてはじめて『MFE』では、なかなかこれは難しいと考え込んでしまった。また逆に、ハードコピーを軸に雑誌を考えるということは、やはり重要だとも思った次第である。どんなに立派なHPをつくっても、あの『土曜日』の紙面を眺めた時に飛び込んでくる彩を作ることは、なかなかむつかしいのではないか。合評会で私と川村さんだけが、わざわざ文章を紙に打ち出しそれを抱えて参加していたが、いかにハードコピーにしていくのかということについては、もう少し考えたいと思う。

ところで『世界文化』と『土曜日』の違いは、こうした体裁にかかわることだけではない。それは前者の『世界文化』が、先ほども述べたように、どこまでも既存のアカデミアの枠を抜け出ていないのに対し、『土曜日』は、『土曜日』自体が新たな人のつながりと場を作り上げていったということだ。この違いは、内容の違いではなく、書くそして読むという言葉にかかわる行為のありかたの問題だ。すなわち『世界文化』

が、学者や研究者の属性を前提にしているのに対して、『土曜日』では、読者が作者になり、作者がまた読者になるという書く／読む／書く／読むという運動が連なる中で、新たなつながりや場が構成されていったのである。

近年出版された中村勝『キネマ／新聞／カフェー 大部屋俳優・斎藤雷太郎と『土曜日』の時代』（ヘウレーカ 2019年）に生き生きと描かれているように、既存の属性から離脱する人々が渦巻のように『土曜日』に集まっていったのである。またこの書く／読む／書く／読むの運動の舞台として、京都市内の多くのカフェーが存在した。京都の南に駐屯していた第16師団の兵士たちも、『土曜日』を待ち焦がれ、カフェーにやってきたのである。京都市内の多くのカフェーが、『土曜日』によって新しい空間になったのである。『土曜日』の彩とタブロイド判という体裁は、この書く／読むにかかわる運動の連鎖と人々の新たなつながり、新たな場の登場ということに、密接に関係していたのである。『MFE』の彩も、そのような場の展開の予感として、私は受け止めておきたいと思っている。

ところで書く／読むという言葉にかかわる行為は、知あるいは知るということでもある。読んで知り、知ったことを書こうとする。あるいは書きながら知り、読みながら知る。この知るという営みは、多くのことを引き起こす動詞だ。すなわち知ることには、あらかじめ観察する安全地帯が設けられた営みではない。もし安心して眺められる観察があるとしたら、それは安全地帯を

前提にした極めて限定された行為だ。知るとは、なによりもその動詞を担う者を変容させ、場合によっては壊滅的な状態へと引き連れていく。この時、知るという動詞の目的語である対象は、あたかも主語のように知る者を動かしていく動因となる。知る者は、知ることにより浮かび上がる対象を自らの動因となすのだ。またそこでは、知る者は知る対象と重なり合いながら、両者はともに動きの中にある。

知るということにおける「ミメシスの変身」。準備号にある車承棋さんの「「観察＝知＝生成」の実験～MFEの始まりに寄せて」が、『MFE』における「私たち」を先取りして描き出したのは、こうした認識するものと認識対象が抜き差しならない関係の中で共に動態へとはいっていく「ミメシスの変身」だ。知るということにかかわる書く／読むの連鎖は、こうした変身を蔓延させていく。また「ミメシスの変身」を遂げつつある者たちは、書く／読むという行為の中で出会うのであり、この者たちの密会の場所が、雑誌なのである。それはそれぞれが属性を離れて他の者になろうとする場であり、集まりだ。

そこでは変身は、つながろうとすることでもある。つながろうとしながら、ともに世界を作り上げていく。また属性から離れるのだから、属性を前提にする評価や比較は不可能になり、「比較不可能なものに見える諸結果物が星座(constellation)を作る」(25頁)のだ。星は比較され評価されるのではなく、方向性をもったベクトルにより結び付けられ、「座」として拡がっていく。

自分の住まう世界が、自分も含めて変わっていく世界として浮かび上がるのは、こうした星たちの密会においてなのかもしれない。「多焦点拡張」、あるいは星たちの密会。私には具体的な密会場所として、どうしてもカフェで読みながら論じ合い、論じあいながら書いている風景が見えるのだが。

それはともかく、車承棋さんがプロレタリア文学運動に参加した金南天にそくして具体的に議論しているように、そこでは書くということに焦点が当てられているといえる。対して尹汝一さんの「MFEの雑性のために」は、雑誌の要点に読むという行為を定めている。雑誌編集にかかわってきた汝一さんの文章は、極めて実践的で説得的だ。そしてなによりもなるほどと思ったのは、雑誌が雑誌として、すなわち星座という密会として登場するところに、読むという行為をすえているところだ。「雑誌は単純に「ある」のではなく、「立ち上がるもの」(40頁)であり、それが実現されるのは読むあるいは読者たちの場所なのだ。

ところで準備号は、昨年6月13日におこなった「MFE集会」をふまえたものでもある。私は当初はオンライン集会ということに懐疑的だったが、それでも雑誌にかかわる人たちの顔が見れたということは大きな意味を持っているのだと、準備号を読んで思う。川村さんが書いているように、この集会で「まだ見ぬ誰か、これから会うであろう誰かに向かって、何事かを話し伝えようと話しかける、そうした未来へと投企する姿勢を思いがけず感触できた」のである。

この「感触」ともかかわるが、準備号を読んで理解できたのは、書く行為が、読む行為につながっていくという期待である。この期待は、集会がおぼろげながら作り上げたことではないだろうか。そして、読まれるに違いないという期待が、書くということをけん引しているように思う。準備号に「『MFE』オンライン集会に参加して」をよせた博物館で学芸員として働く竹原明理さんが、「絶えずある違和感や、時に抱いてしまう怒りや悲しみのような感情や意識は別に捨てなくてもいいのだと、今回のオンライン集会に参加して思えた気がします」と書いているのを読んだとき、キチンと読まれるに違いないと思えることが、言葉として記すべきことを引き出す力になるのだと思った。あるいは前述した日高由貴さんは、「読んでくださるかもしれないかたがたへのお手紙のような感じで書いてみたい」と書いている。読むことが書くことにつながっていくような共同性がみえるということが、言葉を生み出すのだろう。

それは準備号で古川岳志さんが「編集委員という名目も、学術雑誌という枠組みも、書く／読むの関係性を作り出すための道具として利用すればいいのではないか」と述べ、「編集委員という役割に課せられているのは、とりあえずは、集まった文章を全部読むこと」であり、したがって編集委員がいるということで「読まれないかもしれない、キチンと読まれないかもしれないという不安をとりのぞく」としたことに直結する。古川さんの「「雑誌」への期待一ゆるく束になるために」をぜひ読んでほしい。

言葉をちゃんと読むということ。これが『MFE』の出発点だと思う。またそれは読むことが、読んだ後で書くことにつながっていくということだけでなく、読まれるのだという未来への期待が書くことを引き出すということでもあるだろう。

読む中で雑誌は「立ち上がる」。それはその雑誌が、掲載されたからその文章が意味があるとか、ましてや本数でその価値を計算することと無縁であることを意味している。掲載が終着点なのではなく、この「立ち上がる」なかで言葉は命を獲得し、そしてまさしく書くという行為もこの読むという行為に向けてある。すなわち「立ち上がる」その瞬間を予感しながら読み手という他者を思い浮かべる時、言葉が引き出されるのだ。この引き出す力に書くという行為をゆだねるところに言葉が生まれるのである。尹汝一さんはこの力を、「他者との関係が文章をひっぱる張力であり、文章を繰り広げる張力」だという。それは他者となんとしてもつながろうとする思考の悶えであり、このような思考はやはり書く者を変身させてくたろう。いいかえれば「ミメシス的変身」を遂げつつあるものの密会が生まれるためには、張力が生じるような雑誌でなければならないのだ。そしてその変身は、読むことにおいて現勢化する。この時雑誌は、「立ち上がる」。

こうした読むことへの注視は、先ほども述べたような掲載の時点で完了したとされる掲載の是非、すなわち査読において語られる文章の意味や意義とは根源的に異なるものである。また読まれることを発行部数

や引用回数でカウントすることとも違う。またさらに、読まれることにおいて立ち上がる雑誌は、流行や学会動向などという整理された時間を刻まない。それは堆積された地層をなし、発掘された時すなわち読まれた時に、時間を獲得するのだ。いいかえれば文章たちは、立ち上がる瞬間を待ち続ける待機状態にあり、その待機状態が刻む時間は、流行りや動向とは無縁のものである。言葉たちは読まれることを確信しながら、たとえ10年であろうと100年であろうと待ち続けるのだ。これは掲載された時点で分類され評価が下されたとされる査読付き学術誌とは根本的に異なる在り方だ。彩とは、まだ見ぬ未来に向けて待機している状態を示しているのだろう。

Ⅲ 「私」という文体と暴力の予感、あるいは「後ろ姿」

ところで前述した車承棋さんがいう「ミメシス的変身」は、知るということをめぐる認識するものと認識対象が抜き差しならない関係にはいることであり、それは認識する者としての私、あるいは対象を言葉にしようとする私という存在が、押し出されていくことを意味している。しかもこの私は、変身のなかで安定的な属性から離脱していくのであり、いいかえれば私は居場所のない不安を抱え込みながら、知ること、書くということ、読むということを遂行していくことになる。この「私」が押し出されながら書き進めるということ、またそのような「私」が読まれることにおいて立ち上がるのが、準備号に寄せ

られた文章から伝わってくる。

また車承棋さんが金南天から見出したのは、こうした変身を遂げつつある「私」は、徹底した描写あるいは観察をその生成の動因にしているということだ。そしてそこで想定されているのは、これまでの認識枠組みが融解し、これまでの身体が崩壊し始め、従来のやり方だと何をしても無駄という困難が状況を支配しはじめるという事態である。やや乱暴にいつてしまえばそれは、従来の社会や歴史を構成するはずの集団やその属性がもはや構成要素にならず、また認識の枠組みの前提にもならないという事態であり、だからこそ知るという行為が属性からの離脱を導くのである。この離脱を担うのは、未知の未来を引き受けんとする起点としての「私」だ。既存の世界が不確定になり、融解し、自分がどこに所属しているわからなくなっても、それでも「私」はある、という訳だ。

そしてこの「私」にとって最も重要なことは、準備号で沈恬恬さんがいうように、不確実を抱え込みながら生きるという確信だ（「確信の不確実性に向けて～「終わりの感覚」を抱えたままで」）。自らの歴史も記憶も消滅しつつある中に、「私」は断固たる確信をもって生きるということだ。まただからこそ、この不確実をすぐさま確かな未来に置き換え、別の秩序のなかに「私」を解消してはならないのだろう。新しく準備された秩序にすぐさま復帰してはならないのだ。重要なのは、記憶が不確実になりながらも、それが一方的に書き直される力に全身で抗うことなのである。すぐさま次

の新しい所属に落ち着いてはならないのだ。

少し脱線するが、最近私は、精神科医の中井久夫の文章をときどき読むようになった。その中井の文章の中で、変わったものが一つある。楡林達也というペンネームで書かれた「抵抗的医師とは何か」というもので、ある大学の医学部の学生自治会により1963年ごろに刊行されたものだ。多くのエッセイを書いている中井自身が、「私の書いたもののなかでは、ただ一つ熱っぽい文章」と述べ、同時に「私の考えが以後それほど変わったわけではない」というものだが、この文章には、現在の医局や医者という集団が人を殺しているという現状認識と、その中で何を始めるべきなのかという内省的問いが、全体を貫いている。少し大げさにいえば、友人が殺され自らも殺されまた殺すかもしれないという現状の中で、何をなすべきかを考えようとしたのだ。そしてそこには、「バラバラで孤立しているものを、一つの実体のように三人称複数として扱うことが、そもそもまちがっているのだ」（中井久夫『日本の医者』）という一文がある。未来は、三人称複数において表現される集団や所属で描かれるのではなく、「私」が、そしてこの「私」が人と出会う営みこそが、未来なのだ。「私」は不安を抱え込みながら、密会する。

準備号の全ての文章は、こうした「私」から始まっているように思う。既に言及した竹原さんが、「絶えずある違和感や、時に抱いてしまう怒りや悲しみのような感情や意識は別に捨てなくてもいいのだ」とい

うとき、そこには密やかな「私」の覚悟がある。またオリジナルでなければならないというオブセッションの中で「自己検閲」を語る永岡崇さんの文章からは、粘度の高い内省とともに「私」をめぐる格闘と転轍がある。この「自己検閲」はアカデミアに限らずそこかしこで作動しているが、それはそれぞれにゆだねられた問題ではない。頑張っているものを書けばいい、ということではないのだ。永岡さんがいうように「自己検閲」からはじまる「私」の転轍は、「共振や違和」から生まれる「集団的なオリジナリティの生成」なのだ。竹原さんや永岡さんの文章からは、自らがおかれた場所から再度関係を作りなおそうとする重油のようなリアリティがある。求められているのは、このような「私」と場所の記述なのだろう。

ところで謝花直美さんの「鉄格子のなかの声」では、「米軍が優先する社会で、鉄格子の中にある、沖縄の人々の生」を書こうとする謝花さんは、「自らが立つ場所」とともに「私」が「何をなすべきか」を見出していこうとしているが、ハッと思ったのは謝花さんが、現在のパンデミック状況から戦争あるいは戦場を、そして沖縄戦を感知しているということだ。あえていえば、「自らが立つ場所」は、暴力がせり上がっている社会であり、そこでは戦場は過去のことではなく今と地続きであり、かかる場所から未来が問われているのである。いいかえれば「私」から始まる文章が浮かび上がらずのは、すでに暴力にさらされている私たちである。この「鉄格子のなかの声」

から、未来が始まるのだ。平野克弥さんの言葉を借りればそれは、「息をさせない」なかで息をしようとする事なのだ(「MFEの始まりによせて」)。

くりかえすがその私たちは、一般名称ではなく、あくまでも「私」が出会い、知るといふ遂行的なプロセスにおいて登場する。近藤有希子さんの「「未来は明日を生き抜くものに」—異邦人のチョコレートとルワンダからの退避について」は、パンデミックという言葉ではいいあわすことのできない状況を見事に描き出している。それは「外国人」として退避する「私」から見出される今であり、この浮かび上がる今は、かつてのルワンダ内戦での虐殺と、これからの暴力の予感に包まれている。今なされるべき記述だと思う。そして描き出される現状は、未来への希望でもある。

それは復興や勝利などという言葉であわわされる希望ではない。準備号で何人かの人が言及しているレベッカ・ソルニットの言葉を借りれば、「暗闇の中の希望 (hope in the dark)」であり、暗闇の中にいる私が言葉をつむぎだすときに、闇の彼岸におぼろげなその希望の輪郭だけが浮かび上がるのである。近藤さんはそれを、「私のおばあちゃん」であるルワンダのおばあちゃんから聞いたのだ。「未来は明日を生き抜くもののうちにある」。この「明日を生き抜くもの」は、一般名称ではなく、まずもって「私のおばあちゃん」であり「私」である。そこから始まるのだ。こうした希望は、『MFE』のすべての文章から読むことができる。最初に述べた沈正明さんは、「困難

な状況の中にいる私たちには分け合える言葉があり、それを語れる人たちがいる」と締めくくる。希望とは未来の正しい設計図のことではなく、この「分け合える言葉」であり、「語れる人」のことだ。あるいは成定洋子さんが「言葉の交差し合う場」でいうように「現在のあり様を捉える言葉を丁寧に模索すること」それ自体が希望なのだ。

あらためて川村さんのいう「後ろ姿」を考える。暴力にさらされている者たちの中では、死者たちと生きている人々とは、それほど変わりはないのであり、だからこそこの「明日を生き抜くもの」には、潰えた者たちも参加するに違いない。後ろ姿とは、やはり死を背負った生であり、いつ後ろから撃たれるかわからないという暴力にさらされた身体なのだろう。言葉の在処はこのような身体と共にある。まただからこそ、集い、傍らにいる他者を通して自らの生をそして死を知るのだ。後ろ姿は他者とともにある。それは川村さんのいうように、ともに「ゾンビ」になることなのかもしれない。暴力がせり上がる今をしっかりと見据え、描き、そして密会すること。『MFE』はそのためにあるのだと確信した。色が互いに滲みだしている彩は、境界が定義された分類や属性ではなく、他者とともにある後ろ姿を背負った者たちの、密会のあらわれなのかもしれない。